



地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケア
に関する実践的研究(6):
幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEAC
CHプログラムの展開:
第2次3ヵ年計画(平成11年度～平成13年度)のまとめ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学教育学部旭川校特殊教育特別専攻科障害 児教育研究室 公開日: 2017-07-27 キーワード: 作成者: 古川, 宇一, 木村, 健一郎, 長, 和彦, 寺尾, 孝志, 大場, 公孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008124

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究(6) — 幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEACCHプログラムの展開— 第2次3カ年計画(平成11年度～平成13年度)のまとめ

A Study of Lifelong Care for Persons with Autism and Mental Retardation in the Community(6)
— The Third Report of Project on the Second Three-Year-Plan(1999-2001) of the TEACCH Program —

古川 宇一(Uichi Furukawa)

北海道教育大学旭川校

木村 健一郎(Kennichiro Kimura)

北海道教育大学函館校

長 和彦(Kazuhiko Cho)

旭川肢体不自由児総合療育センター

寺尾 孝士(Takashi Terao)

おしまコロニー

大場 公孝(Masataka Ohba)

おしまコロニー

自閉症児・知的障害児の生涯ケア体制の整った地域社会の創出をめざして、北海道にTEACCHプログラムを導入する10ヶ年計画を立てた。その第2次3カ年計画のまとめを行い、あわせて北海道におけるTEACCHプログラムにかかわる動向を述べた。

画期的であったことは、おしまコロニーが独自に、2001年4月、全国に先駆けて自閉症センター「あおいそら」を立ち上げたことである。その活動はめざましく、まさに地域センターとして機能を果たしている。函館地区では、幼児施設、養護学校、特殊学級、施設においてTEACCHプログラムのアイデアを導入するところが増え、幼児期から成人期にいたる一貫性のある療育システムの可能性が示された。研究活動も活発である。旭川地区では、幼児施設でTEACCHのアイデアを引き継ぎ、小学校特殊学級で導入する教室が増え、道北の1福祉施設が導入4年目になり成果を上げている。研究活動は親も参加して継続している。札幌・道央地区、帯広・道東地区ではおのおの1療育施設でTEACCHの手法を用い、施設でも積極的に導入し成果を上げている。札幌、旭川では、家庭教育にTEACCHのアイデアを用いた積極的な取り組みがなされている。函館地区が先進的モデル地区となり、旭川地区も地道な展開を示し、次の飛躍への準備が整った。

(キーワード：自閉症 知的障害 TEACCH プログラム 生涯ケア 地域)

1. 第2次3ヶ年計画

(1) 研究の背景

「地域を場とし、生涯にわたって、家庭と連携し、適切さと一貫性と継続性のある療育を関係者のチームワークによってリレーすること」は、自閉症、知的障害にかかわるものの願いである。

自閉症児および関連するコミュニケーション障害児への療育プログラムであるTEACCHプログラムは、国際的に評価され、国内各地においても実践がなされている。ノースカロライナにおけるTEACCHプログラムがもっともすぐれている点は、地域社会において、幼児期から成人期まで一貫性と継続性をもったシステムをもっていることである。TEACCHプログラムにかぎらず、いず

本研究は、平成13年度文部省科学研究費基盤研究(B)(1)課題番号11410067の助成を受けた。

れの技法であれ最大の課題は、生活世界としての地域社会に、幼児期から成人期までの適切で一貫性と継続性のある療育システムを構築する点にある。

筆者らのこれまでの研究、「地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究—障害児保育・学校教育・学校終了後までTEACCHプログラムの導入の試み」(平成7年度～9年度、文部省科学研究費、第1次3ヶ年計画とする)および平成10年度の研究において、

1) 函館地域では、「おしまコロニー」におけるTEACCHプログラムの導入が、自閉症者施設療育、障害幼児療育に大きな成果を上げていること、養護学校高等部においての取り組みに成果が見られたことが示された。

2) 旭川地域においては障害幼児の療育において、また、知的障害児の特殊学級において、TEACCHプログラムの構造化の手法を用いた実践がなされ、

自閉児だけでなく、知的障害児にも成果のあることが示された。

2地域での実践から、TEACCHプログラムの構造化の手法が、障害幼児通園施設（幼児期）、知的障害特殊学級、自閉症者福祉施設（成人期）まで有効性を確認することができ、第1次3カ年計画の目的は果たした。

第2次計画の最大の課題は、地域を場として幼児期から成人期まで一貫性と継続性のあるケアシステムを構築することである。両地域とも各ライフステージでの有効性の確認はなされたものの、一貫性と継続性のあるケアシステムの構築にまで至っていない。ケアシステムの中核は①すぐれた療育プログラムの実践モデル提示と共有、および②人材養成とネットワークづくりである。すなわち、TEACCHプログラムのすぐれた実践を随時みせることができ、実践家を養成すること、及び、実践家が地域で有機的なネットワーク組織をもつことである。

（2）研究の目的

本研究は、「地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究」10ヶ年計画の第2次3ヶ年計画をなすもので、①TEACCHプログラムを核とする療育プログラム実践モデル提示、②人材養成と地域ネットワークづくりをめざす。

対象モデル地域は、引き続き函館と旭川とする。

ノースカロライナにおけるTEACCHセンター機能、すなわち診断機能、相談機能、実践指導、研修機能を、函館においては、北海道教育大学函館校障害児教育研究室及びおしまコロニー地域療育センターが、旭川においては、北海道教育大学旭川校障害児教育研究室および旭川肢体不自由児総合療育センターが担う。

本研究の特色は、幼児期から成人期まで、生活世界としての地域社会において、適切で一貫性と継続性のある療育プログラムを、関係スタッフが共有しリレーしていく体制をつくることにある。すぐれた療育プログラムはTEACCHプログラムのほかにも見られるし、幼児期のある機関で、あるいは、学校教育期のある担任のときに、すぐれた療育・教育がなされる例は数多い。しかし、生涯にわたる適切で一貫性と継続性のある地域ケアの体制を整えることは至難の業であり、TEACCH

プログラムのもつ最大の意義はここにあるといえ、本研究はその点を特に重視し、実現を目指すものである。

（3）第2次3ヶ年計画目標

- ①函館、旭川両地区でのTEACCHセンター機能（診断、相談・指導、研修）の確立
- ②障害幼児通園施設、特殊学級、知的障害養護学校、福祉施設との共同研究によるTEACCHプログラム実践モデル提示
- ③TEACCHプログラム研修によるキーパーソン養成、（平成10年度→平成13年度）
- ④生涯ケアシステムの構築と継続的実践研究活動
- ⑤広報活動

（4）平成11年～13年度実践研究計画

1）函館地区

- ①障害幼児通園施設、知的障害特殊学級、知的障害養護学校、福祉施設、地域療育センター、北海道教育大学函館校相互のTEACCHプログラム共同研究
- ②職員養成研修活動（教員、施設職員対象）
- ③地域療育ネットワークづくりと事例研究会活動と関係組織への広報
- ④共同研究スタッフ

北海道教育大学函館校 木村健一郎
おしまコロニー地域療育センター
大場 公孝
おしまコロニー星が丘寮

寺尾 孝士

- ⑤研究協力者 約30名

2）旭川地区

- ①障害幼児通園施設、知的障害特殊学級、知的障害養護学校、福祉施設、旭川肢体不自由児総合療育センター、北海道教育大学旭川校のTEACCHプログラム共同研究
- ②TEACCHプログラム研修会の開催、および共同研究体制づくり
- ③地域療育ネットワークづくりと事例研究会活動、関係組織への広報
- ④研究スタッフ

北海道教育大学旭川校 古川 宇一
旭川肢体不自由児総合療育センター
長 和彦

- ⑤研究協力者 約40名

4. 第2次3カ年計画3年間の活動

3ヶ年次の研究活動は、本情緒障害教育研究紀要、19号～21号に報告されている。その目次一覧を末尾に示す

(1) 第2次3ヶ年計画：第3年次（平成13年度2001年度）の活動

TEACCHプログラムの導入にかかわる北海道全体の動きを見ると、おしまコロニーを中心とする函館地区が突出した成果をあげている。また、旭川道北地区もまた、地域の実情にそって着実な取り組みがなされ、これからの展開への準備が整っている。札幌道央地区もまた、親の会が独自の家庭教育への導入を図り、専門家を巻き込みつつある。道東地区においては、医療・福祉専門家による取り組みがなされている。

【函館地区】

本年、画期的であったことは、おしまコロニーが2001年4月、全国に先駆けて自閉症センター「あおいそら」を立ち上げたことである。その活動は、まさに地域のTEACCHセンターとして機能を果たしている。

函館地区において、幼児施設では「つくしんぼ学級」が先進的にTEACCHに取り組んできた。そのアイデアは家庭にも導入され、親自身の育ちともなった。学級を卒業した児童が養護学校、特殊学級に進むとともに、また、学校教育現場でも、個別教育計画や自閉症児へのもっとも適した教育づくりへの関心が高まり、TEACCHプログラムのアイデアを導入する機運も盛り上がっていった。函館地区を中心とするTEACCH研究会北海道支部の活動も活発に展開された。

非常に悲しかったことは、TEACCHの実践・研究活動の中心を担った鈴木伸五氏を病気で失ってしまったことである。おしまコロニーにとっても北海道にとっても大きな痛手であった。ここに謹んで哀悼の意を表しご冥福をお祈りしたい。

自閉症センター「あおいそら」の活動は真鍋らの報告にあるように、TEACCHプログラムと自閉症療育に深い経験を持つスタッフが配置され、家庭、幼児施設、学校教育関係施設のニーズに応じて、宅配便のようなきめ細かな活動を展開し、自閉症療育のノウハウを伝え、また関係施設の連携を生み出している。

昨2001年の北海道教育大学附属養護学校（函

館）、小・中・高等部が「自閉症児の指導の最適化をめざして」のテーマで公開研究会を開催したが、ここには道南を中心に全道から、特殊教育諸学校、市内特殊学級、福祉施設、幼児施設関係者が集まった。そこに示された教育実践には、TEACCHプログラムの言葉は使われないが、自閉症児のために配慮された構造化のアイデアがふんだんに取り入れられていること、自閉症センター、つくしんぼ学級ほかのおしまコロニーとの密接な連携がなされていた。自閉症センターが関係機関の連携に非常に大きなコーディネート機能を果たし、養護学校もまた学校外との連携に力をそそいでいる。

本3ヶ年計画の研究活動の中で、函館のおしまコロニー、附属養護学校、小学校特殊学級から多くの実践報告が寄せられているが、この自閉症センターが学校教育期と、幼児期・学校終了後の関係機関をつなぐ決定的に大きな役割を果たすように思われる。

学校教育にあっても、附属養護学校が自閉症教育にTEACCHプログラムのアイデアを積極的に取り入れて成果をあげ、保護者からの高い評価を得ている。この研究活動には函館校障害児教育研究室スタッフとの共同研究として取り組まれている。また、市内特殊学級でも構造化のアイデアを積極的にとり入れ、保護者とつくる学級運営に成果をあげている。函館地区では、学校教育との連携により、幼児期から成人期にいたる一貫性のある療育システムの可能性が示された。

人材養成面では、おしまコロニー、つくしんぼ教室、地域療育センター、第二おしま学園、星が丘寮、地域センターぱすてる等の施設が、非常に多くの人材を養成している。また、北海道教育大学函館校、同附属養護学校は共同で研究活動に取り組み、人材養成がなされている。

北海道TEACCH研究会（会長 大場公孝）はTEACCHプログラム研究会北海道支部をかね、おしまコロニー事務局とし、幼児期、学校教育期、成人期にわたる関係者の研究活動体となっている。2002年度には、全国のTEACCHプログラム研究会を開催し、また、TEACCHセミナーを開催する予定である。

【旭川地区】

旭川地区では、幼児施設でTEACCHのアイデアを引き継いでおり、自閉傾向をもつ幼児に大き

な成果を見ている。小学校特殊学級で導入する教室が増え、着実に TEACCH のアイデアを吸収している。幼児施設、小学校特殊学級の実践は、北海道教育大学旭川校特殊教育特別専攻科との共同研究としてなされ、教員養成の上でも大きな役割を果たしている。特殊学級という流動性のある場面であるが、教育ニーズやスタッフ体制の多様ななかでの成果が示されている。

道北地区富良野市にある「北の峰学園」では、TEACCH の構造化を導入して 4 年目になり、大きな成果を上げている。道北地区の福祉施設のなかでははじめてその成果が報告され、いよいよ施設領域の発展の可能性が見えてきた段階である。

旭川肢体不自由児総合療育センターでは、長論文にあるように、同センターにおけるこれまでの短期母子入院結果が報告された。PEP-R と CARS によるきめ細かな診断がなされ、母子訓練に成果をあげている。道北地区において母子訓練でこれほどの成果をあげていること、実は、画期的なことである。

教育大学旭川校は、特殊特別専攻科（情緒障害教育専攻）において、TEACCH プログラムの考え方を基本的な自閉症児教育の方法とおさえて学習、実践している。

旭川 TEACCH 研究会も月例会をつづけ、上記幼児期、小学校、福祉施設での実践の研究交流がなされている。

旭川縦につなぐ会は、特別な教育やケアのニーズをもつ人たちの各ライフステージを、療育関係者のチームワークによって縦につないで、ケア体制の整った地域社会をつくることを目的とする会で、現在は、親の学習会が中心的活動となっている。本紀要 21 号には、旭川地区の保護者から 2 論文、札幌地区から 1 論文、家庭での TEACCH のアイデアを用いた実践事例報告がなされた。

【札幌地区】

札幌道央圏では、2000 年 7 月札幌 TEACCH 研究会が発足し、施設において TEACCH プログラム実践がなされている。

また、親を中心に、TEACCH プログラムのアイデアを家庭での療育に取り入れて実践しているという趣旨のメーリングリストが 2001 年初頭に立ちあげられた。参加者は、TEACCH を実践していく保護者、小児精神科医、養護学校教師、施設職員である。TEACCH プログラムの家庭療育へ

の導入に活発な活動を展開している。S 療育センターにおいて TEACCH プログラムにそった指導がなされている。また、道央の福祉施設において TEACCH プログラムを導入しているところが増加しており、大きな展開の可能性がみられる。札幌自閉症児者親の会が、TEACCH プログラムの研修に非常に積極的な活動を展開している。

【道東地区】

道東地区において、福祉施設において TEACCH プログラムのアイデアを導入し、施設研修会において、TEACCH プログラム部会を設けて研鑽に励んでいる。また、M 病院においても早くから自閉症療育に TEACCH プログラムを取り入れている。

（2）第 2 次 3 力年計画：第 2 年次（平成 12 年度 2000 年度）の報告

情緒障害教育研究紀要、第 20 号参照、本科学研究費関連の研究目次を末尾に掲載する。

【函館地区】

この間函館地区では、幼児通園施設つくしんぼ学級、おしまコロニー星が丘寮は引き続いて実践を深め、また、職場への進出に大きな成果をあげている。また特殊学級で個別教育プログラムあるいは TEACCH プログラムの導入で成果を挙げ、北海道教育大学附属養護学校でも顕著な成果を挙げた。学校教育の個別教育計画に TEACCH のアイデアを積極的に導入し、その成果を担当者は実感を込めて評価しており、学校教育期の展開が著しい。

北海道 TEACCH プログラム研究会は、おしまコロニーに事務局において、TEACCH 研究会北海道支部をかねて、2000 年度、活発な活動を展開した。

【旭川地区】

旭川地区では、小学校で 2 つ目の特殊学級が TEACCH のアイデアを導入して成果をあげている。この学級では、通常学級での「ほめる学級経営」が特殊学級の経営にも大きな成果のあげ、自閉傾向のある児童に担任との強い信頼関係が示されていた。その基盤の上に視覚的構造化のアイデアによって改善がもたらされた。小学校特殊学級で複数の学級で TEACCH プログラムの導入がみられる。旭川肢体不自由児総合療育センターでも、PEP-R、CARS を用いて発達評価を行い、旭川校障害児教育研究室といくつかの事例で共同研究を

行っている。

旭川地区から少し離れるが上川地域として富良野市にある北の峰学園が TEACCH プログラムを導入して3年、障害の重い自閉症者の療育に大きな成果をあげている。

また、2000年4月より、旭川TEACCH研究会を立ち上げ、月例会をもち、幼児通園、教育関係、入所施設関係者、重心施設関係者の参加を得ている。

2年次について次のようにまとめられる。

① TEACCH プログラムのアイデアは、自閉症児の多くに、また、知的障害児にも高い有効性をもつプログラムである。しかし、必ずしも急速な展開をみない背景には、自閉症児療育の歴史が、必ずしもうまく行かなかった経験の積み重ねであったためとも思われる。多くの場合、ある対象には顕著に成果をあげるけれども、半数以上に成果をあげる例は必ずしも多くなかったのではないか。遊戯療法、感覚統合、認知発達治療、構造化、いずれにも学ぶべき多くのことがある。いいものはすべて TEACCH との発想が地域ベースのケアの方法論には必要なのではないか。

TEACCH プログラムは構造化のみではなく、むしろ、生涯にわたる地域ケアの体制こそ学ぶべき点である。極端な話、構造化でなくとも適切さと一貫性と継続性、連携性のある療育が地域があればいいのである。

② TEACCH プログラムの構造化によるケアの成果とともに、構造化によって関わり手と子どもとの関係が付きやすく、子どもの姿がよく見え、関わり手が育ちやすいという側面がある^{12, 13, 14)}。

③構造化場面で、課題を共有することにより、関わり手と自閉傾向をもつ子どもと、情緒的情動的感情的交流がもちやすいという可能性が感じられる。

④後半期の課題は、TEACCH プログラムの学校教育期、幼児期職員の研修体制の確立である。福祉施設職員の養成では毎年のセミナーを開催し、大きな成果を挙げている。

⑤そのほか、函館・旭川両地区内の関係機関導入を半数にまであげること、学校教育期の中高等部での導入と連携、家庭療育への導入、道内他地区への展開の課題があげられる。

⑥ノースカロライナでは、膨大な州予算を獲得して TEACCH センターの運営に当てられている。

道予算を獲得できるまでの実践的評価をえなければならぬ。愛知県では県議会で TEACCH センターの有効性と導入に関する質問がなされ、愛知県コロニーではそれをうけた実践がなされている。

また、ノースカロライナ州では自閉症児の親の会が TEACCH プログラムを推進する大きな力となっている。親との連携が課題である。

(3) 第2次3カ年計画：第1年次（平成11年度1999年度）活動概要

① TEACCH プログラムマニュアル作成

幼児期通園施設つくしんぼ学級での実践をもとに、幼児期の実践マニュアルが村川哲郎らによって作成された。6年にわたってたゆまぬ努力を傾けた実践の蓄積である。家庭との連携における課題を提起しているが、それだけ密接な連携を行っているがゆえの課題提起である。

学校教育期にあつては、石狩市立若葉小学校の早瀬伸子らによって、特殊学級（情緒障害）における実践をもとに、マニュアルとして利用できる報告がなされている。昨年（1998年）の紀要18号には、旭川市立大有小学校の中保仁らによって特殊学級（知的障害）での実践の成果が報告されている。

北海道教育大学付属養護学校（知的障害）では、小学部の1教室が学習の構造化（物理的、スケジュール的）をすすめている。

居住施設における実践マニュアルが寺尾孝士らによって作成された。施設から地域へ、職場へと生活の広がりに TEACCH プログラムが大きな貢献をなしている。

(4) 10ヶ年計画の第1次3ヶ年計画と成果

1995年～1997年、おしまコロニーの大場公孝氏、北海道教育大学函館校の木村健一郎氏とともに、文部省科学研究費による共同研究、「地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究—障害保育・学校教育・学校終了後までTEACCHプログラム導入の試み—」（研究代表：古川宇一）の第1次3ヶ年計画を行った。

第1期計画として函館地域と旭川地域をモデル地域とし、両地域での各ライフステージにおける導入を試み、その成果は「情緒障害教育研究紀要」第15号～17号に報告されている。（末尾の第1次計画期論文一覧参照）

2段階とした。施設での導入で、少なくとも2施設が非常に確かな経験を蓄積している、3施設におよんでいると思われるが確かなところで第2段階にとどめておく。

各ライフステージを縦につなぐ連携では、幼少連携がなされている。小・中および中・高連携は、養護学校においてはなされていると思われ、第1段階とした。

一方、旭川においては、第2段階といえるのは小学校期で、知的障害特殊学級が構造化をとり入れた工夫を続けている。幼児施設では1施設が経験を蓄積している。中学期、高校期でのひろがりはまだ見られない。過去4年間で1福祉施設がTEACCHの導入で成果をあげた。

2000年春からはじまった旭川TEACCH研究会の活動には旭川市内からの参加も多いのこれから進展が期待される。

6. 第3次3ヶ年計画

北海道にノースカロライナ州のTEACCHプログラムシステムを導入する目標の到達点は、道内5カ所、道南、道北、道央、道東、札幌にTEACCHセンターを公的予算で設置することである。しかし、最初の10ヶ年計画においてはここまでの実現は困難であろう。第3次3ヶ年計画の目標は、過去7年間の函館地区(道南)・旭川地区(道北)の取り組みを踏まえ、道央、道東地区の活動を加え、全道にTEACCHプログラムのアイデアを取り入れた実践と研究を展開し、TEACCHセンター的機能を果たす場の確保することである。

すでに見たとおり、函館地区がもっとも先進的に取り組み、また、全道各地でTEACCHプログラムを展開する地盤ができてきた。「地域を場とし、生涯にわたって、家庭と連携し、適切さと一貫性と継続性のある療育を関係者のチームワークによってリレーすること」の実現に向けて、地域ごとに体制を整え、また地域ごとに連携を深めながら、さらに前進したい。

【本計画関連1992～1998年の文献】

1992年度

1) 古川宇一・小室利乃・篠崎麻利子(1993): TEACCHプログラムによる障害児者の地域ケアに関する実践的研究(1)地域での取り組みに向け

て、情緒障害教育研究紀要、第12号、41-44

2) 小室利乃・篠崎麻利子・古川宇一(1993): TEACCHプログラムによる障害児者の地域ケアに関する実践的研究(2)自閉傾向のあるM君への取り組み、情緒障害教育研究紀要、第12号、45-50

3) 瀬川真砂子・倉内 裕和・小室利乃・古川宇一(1993): TEACCHプログラムによる障害児者の地域ケアに関する実践的研究(3)障害幼児通園施設での試み、情緒障害教育研究紀要、第12号、51-56

1993年度

4) 瀬川真砂子・松倉ともえ・畑野幸枝・古川宇一(1994): 障害幼児通園施設におけるTEACCHプログラム導入の試み(1)きりん組TEACCH2年目、情緒障害教育研究紀要、第13号、127-134

5) 古川宇一・大家光憲・中川原チサ子・倉内和宏・日比野和江・橋本征彦(1994): 障害幼児通園施設におけるTEACCHプログラム導入の試み(2)みどり学園3クラスの1年目の取り組み、情緒障害教育研究紀要、第13号、135-138

6) 畑野幸枝・瀬川 真砂子・松倉ともえ・古川宇一(1994): 障害幼児通園施設におけるTEACCHプログラム導入の試み(3)自閉傾向のあるA君への取り組み、情緒障害教育研究紀要、第13号、139-144

7) 藤原智佳子・若園昌子・武内裕香・古川宇一(1994): 障害幼児通園施設におけるTEACCHプログラム導入の試み(4)B君の事例、情緒障害教育研究紀要、第13号、145-152

8) 先崎明美(1994): 障害幼児通園施設におけるTEACCHプログラム導入の試み(5)C君と私のコミュニケーション能力の変容について、情緒障害教育研究紀要、第13号、153-156

9) 川除照之・須藤和宏(1994): 自閉傾向を持つ知的遅滞児A君との関わり、情緒障害教育研究紀要、第13号、157-164

1994年度

10) 早瀬伸子・横山桂子・佐藤朋子・五十嵐慈保子(1995): 障害児学級でのTEACCHプログラムの指導2年目、情緒障害教育研究紀要、第14号、55-62

11) 瀬川真砂子・倉内裕和・横田和恵・古川宇一(1995): 障害幼児通園施設における TEACCH プログラム導入の試み 1994(1)3年目のきりん組、情緒障害教育研究紀要、第14号、63-72

12) 水野修・若園昌子・松倉ともえ・古川宇一(1995): 障害幼児通園施設における TEACCH プログラム導入の試み 1994(2)就学前指導の試み一、情緒障害教育研究紀要、第14号、73-82

1995年度

13) 寺尾孝士・大場公孝(1996): 入所施設における TEACCH プログラム導入の実際ー第二おしま学園における実践ー、実践情緒障害教育研究紀要、第15号、1-10

14) 村川哲郎・鈴木伸五・松浦恭子・岩井真由美・見延真奈美・水野栄子・大場公孝(1996): 通園施設における TEACCH プログラム導入の実際ーつくしんぼ学級における実践、情緒障害教育研究紀要、第15号、11-22

15) 長谷部未央・木村健一郎(1996): 自閉症児教育における TEACCH プログラムの検討(その1)ー通園施設「つくしんぼ学級」の実践に学ぶー、情緒障害教育研究紀要、第15号、23-36

16) 早瀬伸子・横山桂子・佐藤朋子・五十嵐慈子(1996): 障害児学級での TEACCH プログラム的指導 3年目ー子どもが少し見えてきたー、情緒障害教育研究紀要、第15号、37-42

17) 飯岡智子・瀬川真砂子・中川ノリ子・伊藤由貴美・古川宇一(1996): 障害幼児通園施設における TEACCH プログラム導入の試み 1995ーコミュニケーションの深まりと抽出指導の意味ー、情緒障害教育研究紀要、第15号、51-56

18) 千田重幸・中保 仁・小川照美・古川宇一(1996): 知的障害児学級における自閉児 Y君の個別指導の試みー IEP・TEACCH の方法に学びながらー、情緒障害教育研究紀要、第15号、43-50

19) 古川宇一・木村健一郎・大場公孝・寺尾孝士・村川哲郎・鈴木伸五・長谷部未央・早瀬伸子・瀬川真砂子・中保 仁・千田重幸・飯岡智子(1996): 地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究ー障害保育・学校教育・学校終了後まで TEACCH プログラム導入の試み(1)、情緒障害教育研究紀要、第15号、57-64

1996年度

20) 鈴木伸五・齊藤雅子・大場公孝(1997): 「診断」から始まる家族支援・地域支援のあり方についてー TEACCH プログラムより学ぶー、情緒障害教育研究紀要、第16号、11-21

20) 見延真奈美・岩井真由美・村川哲郎・大場公孝(1997): 通園施設における TEACCH プログラム導入の実際ーつくしんぼ学級の実践 1996ー、情緒障害教育研究紀要、第16号、22-31

22) 寺尾孝士・鈴木伸五・大場公孝(1997): TEACCH プログラムにおける現場職員のトレーニングについて、情緒障害教育研究紀要、第16号、32-41

23) 齊藤宇開・志村克美・和倉 歩・木村健一郎(1997): 自閉症児教育における TEACCH プログラムの検討(その2)ー養護学校高等部生徒の一事例を通してー情緒障害教育研究紀要、第16号、42-56

24) 早瀬伸子・横山桂子・五十嵐慈子・小林一恵(1997): 障害児学級での TEACCH プログラム的指導 4年目ー個別教育計画の歩みの一歩ー、情緒障害教育研究紀要、第16号、57-64

25) 中保 仁・岡 信恵・齋藤千尋・李 揆晚・高杉誠一・鈴木明子・金子 裕・長 和彦・古川宇一(1997): 特殊学級での「個別の指導・学習」ー旭川市立大有小学校の実践ー、情緒障害教育研究紀要、第16号、65-72

26) 古川宇一・瀬川真砂子・中保 仁・瀬川俊行・長 和彦(1997): 旭川における TEACCH プログラムをめぐる動向と「縦につなぐ会」の活動について、情緒障害教育研究紀要、第16号、73-78

27) 古川宇一・木村健一郎・大場公孝・寺尾孝士・鈴木伸五・村川哲郎・中保 仁・瀬川真砂子・早瀬伸子・長 和彦・大場公孝(1997): 地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究ー障害保育・学校教育・学校終了後まで TEACCH プログラム導入の試み(2)、情緒障害教育研究紀要、第16号、79-80

1997年度

28) 越後谷智子・見延真奈美・大沢京子・大場公孝・村川哲郎(1998): 通園施設における TEACCH

CCHプログラム導入の実際—つくしんぼ学級における実践Ⅲ—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、51-61

29) 寺尾孝士・明庭和行・大場公孝(1998)：TEACCHプログラムのアイデアを応用した職場実習の取り組み、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、32-41

30) 中保 仁・岡 信恵・亀淵興紀・畑中雅昭・笠井保志・白川理恵・富田晃子・長 和彦・古川宇一(1998)：「個別の学習」をとり入れた特殊学級の教育計画と実践経過—旭川市立大有小学校「松かさ学級」の取り組み—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、67-78

31) 畑中雅昭・中保 仁・岡 信恵・亀淵興紀・笠井保志・白川理恵・富田晃子・長 和彦・古川宇一(1998)：IEPとTEACCHプログラムの手法を用いた「家庭での指導」と「一人でべんきょう」の実践—小学校特殊学級での事例研究—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、79-90、

32) 富田晃子・中保 仁・岡 信恵・亀淵興紀・畑中雅昭・笠井保志・白川理恵・長 和彦・古川宇一(1998)：A君の意思表現獲得への一ステップ—小学校特殊学級における関わりから—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、91-99

33) 白川理恵・中保 仁・岡 信恵・亀淵興紀・畑中雅昭・富田晃子・笠井保志・長 和彦・古川宇一(1998)：特殊学級におけるA君とのかかわり—指示理解の深まりを目指して—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、100-106

34) 笠井保志・中保 仁・岡 信恵・亀淵興紀・畑中雅昭・富田晃子・白川理恵・長 和彦・古川宇一(1998)：特殊学級におけるA君とのかかわり—TEACCH的手法を取り入れた買い物学習—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、107-112

35) 古川宇一・木村健一郎・寺尾孝士・村川哲郎・鈴木伸五・斎藤宇開・中保 仁・瀬川真砂子・早瀬伸子・長 和彦・大場公孝(1998)：地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究(3)—TEACCHプログラムの普及に関する地域評価の試み—、情緒障害教育研究紀要、第 17 号、79-80

36) 中保仁・岡信恵・亀淵興紀・粥川一成・谷川忍・矢口少子・長和彦・古川宇一(1999)：旭川市立大有小学校「松かさ学級」における IEP・TEACCH を取り入れた指導 1998 —集団指導と個別指導および家庭との連携を通して—、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、77-89

37) 矢口少子・中保仁・岡信恵・亀淵興紀・谷川忍・粥川一成・長和彦・古川宇一(1999)：注意欠陥症候群といわれた子どもとのかかわりと理解—受け入れ、示し、手を添え、励まし、ほめること—、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、91-100

38) 谷川忍・中保仁・岡信恵・亀淵興紀・矢口少子・粥川一成・長和彦・古川宇一(1999)：小学校特殊学級におけるAくんとのかかわり—自閉症児A君の指示理解の高まりを目指して—、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、101-112

39) 粥川一成・中保仁・岡信恵・亀淵興・谷川忍・矢口少子・長和彦・古川宇一(1999)：松かさ学級における思春期を迎えた自閉的傾向児A君とのかかわり—TEACCH的手法を取り入れた「一人でおつかい」、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、113-120

40) 中川原文香・上野真由美・谷島泰三・古川宇一(1999)：自閉的傾向をもつA君との自己コントロールを目指した試み—TEACCHプログラムのスケジュールの構造化に学ぶ—、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、121-126

41) 熊谷由美子・紙谷恒・古川宇一(1999)：特殊学級における自閉症児Aちゃんの文字学習、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、127-132

42) 川辺亜衣・西山早苗・伊藤由貴美・瀬川真砂子・青山久子・沖潤一・古川宇一(1999)：自閉的行動特徴の消失していった幼児に関する—考察—TEACCH的手法を用いたかかわりを通して—、情緒障害教育研究紀要、第 18 号、133-140

43) 古川宇一・木村健一郎・村川哲郎・寺尾孝士・大場公孝(1999)：北海道におけるTEACCHプログラム導入の現状と展望—幼児期・学校教育期・成人期の社会生活まで、適切で一貫性と継続性のあるケアを目指して—、日本特殊教育学会第 37 回大会発表論文集、L4

1998年度

【第2次3カ年計画3年目の研究題目：情緒障害教育研究紀要第21号】

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究（Ⅱ）

－家庭教育・幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEACCHプログラムの展開－

第3年次

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究（6）

－幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEACCHプログラムの展開－

第2次3カ年計画（平成11年度～平成13年度）のまとめ

古川 宇一・木村 健一郎・長 和彦・寺尾 孝士・大場 公孝	1
自閉症の人たちの支援 －自閉症センター（あおいそら）の活動を通じて－	
真鍋 龍司・大場 公孝・寺尾 孝士	13
小学校特殊学級におけるIEPに関する事例研究（3） －TEACCHの手法に学んで－	
谷川 忍・植竹 敦子・土谷 智子・高橋 絵理子・阿部 聖子・林 明子	21
養護学校（知的障害）における自閉症児指導法に関する実践研究（3）	
－その1 メッセージメイトを用いた食事場面における要求言語行動の形成－	
太田 千佳子・志村 克美・吉成 透・和倉 歩・辻 剛一・鈴木 裕美	
大井川 健・波佐谷 佳織・佐藤 寿恵・青山 眞二・木村 健一郎	29
養護学校（知的障害）における自閉症児指導法に関する実践的研究（3）	
－その2 教室環境の整備と関係者の連携－	
志村 克美・太田 千佳子・吉成 透・和倉 歩・辻 剛一・鈴木 裕美	
波佐谷 佳織・佐藤 寿恵・大井川 健・青山 眞二・木村 健一郎	34
ことばの遅れをもつ子ども達のための短期母子入院の概要	
長 和彦・角谷 諭美・荒木 章子・福田 郁江・田中 肇・岡 隆治	38
言葉が乏しいと思われた自閉症幼児S君の豊かな言語世界	
柳瀬 尚樹・山本 宏美・武田 治恵・和久 貴仁・古川 宇一	45
言語障害と自閉的傾向のあるAちゃんの対人関係と発語について	
山本 宏美・柳瀬 尚樹・竹田 高士・早勢 順子・中川 ひとみ・古川 宇一	55
特殊学級におけるTEACCHプログラムのアイデアを取り入れた実践	
－環境のわかりやすさとA君のコミュニケーションの広がり－	
菅原 千尋・小笠原 智・古川 宇一	63
場所とスケジュールの構造化を用いた特殊学級の取り組み～自閉症児の事例をとおして～	
幾島 真理子・鳴川 啓子・古川 宇一	71
「自ら進んで活動する力」の高まりをめざしたAさんとのかかわり	
“遊びを通じた関係性の成立”と“TEACCH的手法を用いた個別学習”の実践	
渡辺 順彦・岡 信恵・郡司 竜平・加藤 亜湖・古川 宇一	75
わが家のTEACCHに向けた試み	
木村 隆・木村 尚美	89
家庭におけるTEACCHの構造化導入の試み	
山瀬 正己・山瀬 恵美子	97
自閉症のわが子の合同修学旅行 －事前旅行とスケジュール表への写真利用－	
片山 寛美・片山 孝司	109
思春期自閉症児の余暇活動に関する一考察 ～家庭から外へ～	
北 伸治・古川 宇一	113
北の峯学園におけるTEACCHプログラム導入の取り組み －導入の経過と問題行動改善の一事例－	
廣島 君恵・広瀬 郁子・古川 宇一	121

【第2次3カ年計画2年目の研究：情緒障害教育研究紀要第20号】

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究(II)

—家庭教育・幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEACCHプログラムの展開—

第2年次

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究(5)

—幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおけるTEACCHプログラムの展開—10ヶ年計画中間点での展望

古川 宇一・木村 健一郎・長 和彦・大場 公孝 123

「21世紀型『情緒障害児教育』への視点と提言」

末光 茂 127

家庭との連携

—TEACCHプログラムのアイデアを利用して—

時田 睦美・坂田 貴宏・金沢 京子・大場 靖子 133

自閉症者に対する実習支援プログラムへの取り組み

—星が丘寮の実践を通して—

明庭 和行・大場 公孝・寺尾 孝士 139

TEACCHプログラムの手法を取り入れた個別指導

—小学校特殊学級での事例研究 レポート2—

畑中 雅昭 145

小学校特殊学級におけるIEPに関する事例研究(2)

—個に応じた指導の充実を目指して—

谷川 忍・植竹 敦子・土谷 智子 155

養護学校(知的障害)における自閉症児指導法に関する実践研究(2)

—活動への参加が不安定なH児への取り組みを通して—

太田 千佳子・志村 克美・吉成 透・青山 眞二・木村 健一郎 163

多動と自閉傾向の軽減した幼児の事例

—TEACCHプログラムの手法を共有したみどり学園と関係機関の連携—

小野 久美・竹田 高士・瀬川 眞砂子・高橋 眞理・岡 隆治 171

小野 栄治・甲田 裕子・神野 紋子・古川 宇一

自閉傾向をもつS君の個別学習についての一考察

—構造化された場面でのコミュニケーション行動の変容—

神野 紋子・小野 久美・甲田 裕子・大家 光憲 179

前川 愛子・長 和彦・古川 宇一

自閉傾向を持つAちゃんの個別学習についての一考察

—コミュニケーション能力を伸ばすための支援のあり方を学ぶ—

甲田 裕子・小野 久美・神野 紋子・渡辺 まゆみ 186

青山 強・長 和彦・古川 宇一

A君の社会生活スキルの獲得と情緒性の広がりを目指して

—買い物学習・靴ひも結び・絵本の読み聞かせ—

鈴森 玲子・岡 信恵・齋藤 めぐみ・大西 将隆 193

加藤 亜湖・長 和彦・古川 宇一

自閉傾向を持つA君へのTEACCHのアイデアを用いた取り組み

—行動の切り替えと給食の係活動におけるかかわり手側の工夫—

古賀 いずみ・小笠原 智・田中 純子・中辻 敦子 201

菅原 千尋・大垣 麻実・長 和彦・古川 宇一

【第 2 次 3 カ年計画 1 年目の研究：情緒障害教育研究紀要第 19 号】

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究（Ⅱ）

－家庭教育・幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおける TEACCH プログラムの展開－

第 1 年 次

地域社会における自閉症・知的障害児者の生涯ケアに関する実践的研究（4）

－幼児教育・学校教育・医療・施設ケアにおける TEACCH プログラムの展開－

古川 宇一・木村 健一郎・長 和彦・大場 公孝 69

幼児期における TEACCH プログラムのアイディアの導入

つくしんぼ学級の実践を通して

村川 哲郎・大場 公孝 77

居住型施設における TEACCH プログラムの実践

寺尾 孝士・大場 公孝 85

養護学校（知的障害）における自閉症児指導法に関する実践的研究（1）

－学習の構造化と保護者との連携－

志村 克美・矢口 明・中村 誠司・鳴海 友紀恵
渡邊 倫・木村 健一郎 93

TEACCH プログラムの手法を取り入れた個別指導

－小学校特殊学級での事例研究、レポート 1

畑中 雅昭 100

小学校特殊学級における IEP に関する一実践

－個に応じた指導の充実を目指して－

谷川 忍・富岡 郁・土谷 智子 107

障害児学級の TEACCH プログラム的指導－個別時間割に取り組んで

富士本 桂子・早瀬 伸子・五十嵐 慈保子・小林一恵 117

21 世紀に羽ばたく養護学校をめざして

－北海道東川養護学校における就学相談、居住地域交流、進路支援の実際－

佐藤 満雄・浅岡 美晴・加藤 勝・相蘇 敏・長谷川 利雄
齋藤 智子・菅野 布靖・村瀬健太・岡本敏枝・松野貴衣 125

北海道鷹栖養護学校高等部の教育課程の編成－障害の程度が重い生徒の教育課程のあり方

高橋 勝利・佐々木 博充 133

「自閉症の児童とのコミュニケーションに関する一考察」

－小学校特殊学級（知的障害）の事例から－

柏木 一美・山下 博美・岡 信恵・藤田 めぐみ
大木 俊矢・中保 仁・長 和彦・古川 宇一 143

A 君が「と・け・い」と伝えてくれるまで

－小学校特殊学級における知的障害と言語発達遅滞のある児の事例から－

山下 博美・柏木 一美・岡 信恵・藤田 めぐみ
大木 俊矢・中保 仁・長 和彦・古川 宇一 151

自閉的傾向を持つ A 君のひとりバス下校の取り組み

賀川 由起・上野 真由美・石田 美登里・古川 宇一 157

旭川市における情緒学級（通級システム）在籍児のその後の歩み

－質問紙調査を通して保護者の声から学ぶこと－

猪股 みゆき・古川 宇一 165